

# 鎌田栄吉の経済思想史

— 慶應義塾における経済学教育 —

## Eikichi Kamata's History of Economic Thought: Economic Education at Keio Gijuku

井上 琢 智

After graduating from Keio Gijuku in 1874, E. Kamata (1857-1934) taught at Keio Gijuku. In 1894 Kamata was elected to the House of Representatives, and in 1922 he became the Minister of Education. Starting in 1898 he served as the president of Keio Gijuku for 24 years. He led the ceremony of the 50th anniversary of the founding of Keio Gijuku.

At that ceremony, Kamata gave a lecture looking back on the fifty years of education in economics at Keio Gijuku, presenting his views on the history of economic thought. While referring to mercantilism and physiocracy, he discussed classical economics from the perspectives of liberalism and protectionism. The perspective of his analysis was not that of economic theory but of policy, reflecting Kamata's career as a statesman.

Takutoshi Inoue

JEL : A29, B31

キーワード：鎌田栄吉、慶應義塾、経済学教育

Keywords : Eikichi Kamata, Keio Gijuku, economic education

### I 鎌田栄吉の生涯<sup>1)</sup>

鎌田栄吉は、安政4年8月16日<sup>2)</sup> 紀伊国和歌山能登丁<sup>マツ</sup>（現東長町）に父鎌

---

1) 鎌田の生涯については、特記しないかぎり、以下の文献によった。『鎌田栄吉全集』第1巻、伝記篇「先生の生涯（略伝）」1935年。および曾野洋「鎌田栄吉」『慶應義塾史事典』慶應義塾大学出版株式会社、2008、645-46頁。

2) 戸籍には1月21日とあるが、本人がその誤りを指摘し、8月16日であると語った（2頁）。

田鍬蔵、母澄の子として生まれる。幼名を槌熊と称し、5歳で栄吉と改名した。少年時代に和歌山の藩校学習館（13歳）や開知中学校（16歳）で英学を学ぶ。開知中学校で優秀な成績を修め、同校の内地留学生として慶応義塾へ派遣され、1874（明治7）年4月27日に入塾した<sup>3)</sup>。翌75年3月に卒業し、76年4月に義塾教員となる。1878（明治11）年から1888（明治21）年にかけて、和歌山の自修学校長（1878年3-9月）、鹿児島学校教頭（1881年8月-1883年1月）、大分県中学校長（1886年9月）、大分県師範学校長兼学務課長（1887年6月-88年12月）<sup>4)</sup>などを務めた。鎌田は慶應義塾や招聘された諸学校での教員としての役割の他、1880（明治13）年1月には交詢社創立委員、1889（明治22）年には塾の評議員に就任している。

政治家鎌田の出発点は、1894（明治27）年の和歌山県第一選挙区での衆議院選挙への出馬と当選であった。教育問題に関心をもっていた鎌田は、1895（明治28）年から97（明治30）年にかけて韓国、ヨーロッパを視察しており、政治家として多忙となったこともあり、96（明治29）年には慶應義塾の教員を辞していた。しかし、1898（明治31）年4月福沢諭吉の後<sup>5)</sup>を承けて塾長

3) 入学時の証人は、明治3（1870）年にすでに入塾していた和歌山藩士森下岩楠（1852-1917）であり、彼は1873年には教員になっていた（富田正文監修・丸山信編著『福沢諭吉とその門下書誌』慶応通信、1970、119頁）。

4) 1886年9月に大分中学校校長となり、師範学校の官制の改革で師範学校長になり県の学務課長を兼任することになった鎌田は、慶應義塾の教員でメソヂストであったキッチン（W. C. Kitchin, 1855-1920）、さらに、その従兄弟でメソヂスト南島宣教部のデヴィッドソン（J. C. Davison, 1843-1928）へ外国人教師の雇用を依頼した。

その依頼を受けたのが関西学院の創立者で初代院長となったランパス（W.R.Lambuth, 1854-1921）であった。彼は *The Missionary Reporter* に公募広告を出した。その広告に応じたのがウエンライト（S.H. Wainright, 1863-1950）であった。彼は1888年来日し、大分師範学校の教員となり、その地で宣教活動を行い、1891年に関西学院普通学部長となり、1906年まで、その地位にあった（『ウエンライト博士伝』教文館、1940、『関西学院事典』2001、19-20頁）。

5) 慶應義塾の塾長は、大きく「慶應義塾仮憲法」（1881）を前後して2期に分けられる。仮憲法制定以前には、初代岡本周一（安政5年～明治元年頃）から第12代浜野定四郎（明治11年）までが塾長に就任し、制定以後には、初代浜野（明治14年1月～明治20年10月）、第2代小泉信吉（明治20年10月～23年3月）、第3代小幡篤次郎（明治23年3月～明治30年8月）、第4代の福沢諭吉（明治30年8月～31年4月）が就任した。このように「福沢の慶應義塾」であるにもかかわらず、福沢は塾長にこの1回ほぼ9ヶ月しか就任していない。このこ

に就任<sup>6)</sup>し、1922(大正11年)年6月に文部大臣(加藤友三郎内閣)に就任するまで、24年間にわたってその地位にあった。この在任期間は、歴代塾長の中でもっとも長く、義塾の発展に彼が遺した業績は、第一に海外留学生派遣の開始、第二に商工学校の設立、第三に医学科(後の医学部)の設立、第四に義塾創立50周年記念事業の挙行、第五にその記念事業としての図書館の建設であった。

鎌田は1923(大正12)年文部大臣を辞任し、1927(昭和2)年に枢密顧問官、1932(昭和7)年帝国教育会長に就任した。1934(昭和9)年に死去した。鎌田は、このように慶應義塾だけでなく、日本の教育界へ大きく貢献した。

ところで、慶應義塾入塾前の鎌田の英学修業を見ておくことは有益であろう。明治3(1870)年頃「単語篇」を教わり、「翻訳書」も習った。最初に習ったのが福沢諭吉の『雷銃操法』(巻之1～巻之3、慶応3年～明治2年)<sup>7)</sup>や

---

とは慶應義塾の歴史を考える際の重要な視点を提供してくれる。事実、鎌田は慶應義塾と福沢との関係について「先生はこの塾をもつて一家の家塾と為し、この財産をもつて一家の私有と為すといふが如き考は無かつたということは明白」と指摘している(前掲書『鎌田榮吉全集』第1巻、「50年祭開会の辞」264頁)。もっとも福沢は慶応4年と明治14年から明治34年の間に社頭に就任しており、評議員会議長を明治30年から31年にかけて務めている(前掲書『慶應義塾史事典』874-75頁)。

- 6) この塾長就任の事情を以下のように鎌田は語っている。「……師範学校長を辞して帰京(明治22年1月)した。その時は小泉氏が塾長であった(なお、このときのみ塾長ではなく総長と呼ばれた(前掲書『慶應義塾史事典』661頁))。少しく騒動をやつて居りましたので、その善後策を講じて安定を図るが為には鎌田が帰つて来れば大変都合が好かろうこともあつて、それで又私が教師となることになりました」。その後、小幡、福沢が塾長になり、「小泉先生が実業界に関係しなければならぬ事情があつたので」「明治29年1月に福沢先生から私に塾長になつて呉れまいかといふ懇談があつた」。その後、鎌田は徳川頼倫の洋行に同行し、帰国後の明治30年末に「約束の通り塾長をやつて呉れ」と再度依頼があり、就任した。最初の依頼から就任までの間の「経営は随分困難な状況にあつた」(前掲書『鎌田榮吉全集』第1巻、258-59頁)時期に、小幡と福沢が塾長に就任し、最終的な解決を鎌田に委ねたことになる。なお、上記「騒動」とは、小泉は資金募集、学事改良、大学部創設などの改革を推進したが、福沢や小幡と意見を異にしたことから発したものである。辞任した小泉は日本銀行へ移り、さらには横浜正金銀行の支配人となった(前掲書『慶應義塾史事典』661頁)。なお、引用文中の〈 〉は、筆者による補足説明等である。
- 7) 『雷銃操法』(1864)とは、ライフル銃(ミニユール銃)の扱い方、その教授・訓練法を書いた H. Busk (1815-1882), *The Rifle: and How to Use it* (1st ed., 1862, 邦訳の原典は、1864、1867年版である)の福沢諭吉による邦訳である(前掲書『福沢諭吉事典』90、118、615-16頁)。

『西洋事情』(慶応 2 年)<sup>8)</sup>であった。さらに和歌山県が招いた慶應義塾の吉川泰次郎(1852-95)らから理学初歩、地理初歩を学び、「慶應義塾でやつて居る通りのことを真似をして」「カツケンボスの物理書やカツケンボスの米国史<sup>9)</sup>」をやり、マルカムの英国史<sup>10)</sup>、バーカーの物理書<sup>11)</sup>、セニラルの経済説略<sup>12)</sup>等……全体の教育課程といふものは、確か今の小泉信三君<sup>13)</sup>のお父さ

- 8) 『西洋事情』とは、福沢諭吉の著作で、西洋文明社会の特質と西洋各国の歴史、政治、軍備について解説したものである(前掲書『慶應義塾史事典』117、613-15頁)。
- 9) 「カツケンボスの物理書(窮理書)」とは、G. P. Quackenbos (1826-81), *A Natural Philosophy: embracing the most recent discoveries in the branches of physics and exhibiting the application of scientific everyday life* (1866) の邦訳だが、何版からの邦訳かは不明である。福沢諭吉の『訓蒙究理図解』(1866) 執筆の資料の一冊である(前掲書『福沢諭吉事典』620-21頁)。なお、高橋浩「熊谷県暢発学校の頃の蔵書『窮理図解』と“*Natural Philosophy*”」(『群馬大学図書館報』no.287、2002年12月、3-5頁)を参照のこと。「カツケンボスの米国史」とは、*American History for School* (1877) である。小幡篤次郎は慶応 4 (1868) 年にはこの本を用いて講義をしていたという(前掲書『慶應義塾史事典』639頁)。
- 10) 「マルカムの英国史」の詳細は、不明である。ただし、当時の英米で良く読まれた「英国史」には、Macaulay, T. B. (1800-59), *History of England* (5 vols, 1848-61) と McCarthy, J. (1830-1912), *A Short History of our own times from the accession of Queen Victoria to the General Election of 1880* (1883) がある。後者の邦訳には、高田早苗訳『ジャスティン・マッカーシー著 英国今代史』巻 1 (1899)、『英国今代史 一名 女皇の御宇』(1900) がある。
- 11) 「バーカーの物理書」とは、小宮山弘道訳『パークル著 格物全書』(明治 10-11 年、16 冊) である。原典は、R. G. Parker (1798 -1869), *A School Compendium of Natural and Experimental Philosophy, embracing the Elementary Principles of Mechanics, Hydrostatics, Hydraulics, Pneumatics, Acoustics, Pyromonics, Optics, Electricity, Galvanism, Magnetism, Electro-magnetism, Magneto-electricity* (c. 1871) である。
- 12) 「セニラルの経済説略」とは、渡辺一郎編の『経済略説』(英文) のことであるが、今日ではシーニア(N. W. Senior, 1790-1864)の本ではなく、R. ホエートリの *Easy Lessons on Money Matters* (1833) の第 4 版である *Easy Lessons on Money Matters; for the Use of Young People* (1837) からの抜粋とホエートリの *Introductory Lectures on Political Economy* (1831) の一部を利用したとされる(松川七郎「アダム・スミスのわが国への導入の一齣—渡辺温編『経済略説』(明治 2 年) のこと—」『図書』岩波書店、1971 年 1 月号)。
- 13) 小泉信三(1888-1966) は、慶應義塾大学卒業後教員となり、経済学と社会思想を専攻した。慶應義塾時代の福田徳三にも学び、その指導のもとで W.S. ジェヴォンズの *The Theory of Political Economy* (1871) を『経済学純理』として邦訳した(1913)。1933 年に塾長に就任後も古典派経済学やマルクスに関する著書を多数著した。リカードウ研究で博士学位を取得した。リカードウ研究者として関西学院大学の堀経夫(1896-1981)とも交流があった。塾長

んー当時大阪開成所の教授であった小泉信吉氏<sup>14)</sup>が拵えて呉れたギゾーの文明史<sup>15)</sup>、テラーの万国史<sup>16)</sup>、ウエーランドの経済書<sup>17)</sup>をも学んだ。鎌田によれば「この時になつて初めて相当の英書を本当に出来る青年」(142)になったという。

慶應義塾に派遣されることになった鎌田は、寺子屋の先輩で当時すでに慶

---

退任後、保守的自由主義者としてマルクス主義批判を行った。なお、伝記として、富田正文監修、今村武雄『小泉信三伝』(文芸春秋、1983)がある。

- 14) 小泉<sup>ノブキチ</sup>信吉(1846-94)は、和歌山に生まれ、1866年入塾し、義塾、舎密局、大学南校の教員を経て、1874年イギリスに留学した。帰国後、大蔵省奉任御用掛、1880年の横浜正金銀行創立に際して、福沢の推薦で副頭取に就任。1887年に慶應義塾総長となった。小泉信三は彼の長男である(前掲書『慶應義塾史事典』660-61頁)。なお、洋学校(1869年9月)は、1870年10月大阪開成所と改称し、1871年7月に理学校(1870年5月)と合併し、大阪開成所の校名が存続した。
- 15) 「ギゾーの文明史」とは、F. P. Guizot (1787-1874)の *Histoire de la civilization en Europe* (1829-30)のことで、英訳版が *General History of Civilization in Europe* (translated by W. Hazlitt, with occasional notes by C.S. Henry, [1842] 1873)である。本書は、「明治5、6年頃から15・16年頃」の「義塾古代上級生の愛読書」の一冊であるという。他に、バククルの文明史、トクヴィル垂米利加民主政治……ミル氏経済原論などが挙げられている(『慶應義塾五十年史』1907、535頁)。なお、本英訳書からの重訳に永峰秀樹訳『欧羅巴文明史』(1874)などがあり、原典だけでなく邦訳も含めて、また慶應義塾だけでなく、日本でもっとも読まれた歴史書の一冊である(三橋猛雄編『明治前期思想史文献』、明治堂書店、1976、210頁)。
- 16) 「テラーの万国史」とは、ウキリアム・テラー(低洛爾氏)著・木村一步等訳『万国史』(明治11-18年、4冊)である。原典はW. C. Taylor, *A Manual of Ancient & Modern History* (1845)である。
- 17) 「ウエーランドの経済書」とは、*The Elements of Political Economy* (1837)であり、1877小幡篤次郎によって『英氏経済論』として邦訳された。また、「ウエーランドの修身書」とは、*The Elements of Moral Science* (1835)であり、1874年に阿部泰蔵によって『修身論』として、77年には小幡篤次郎によって『修身論』として邦訳された。福沢の『学問のすゝめ』(1872-73)は、このウエーランドの影響がみられ、いわゆる明治初期のウエーランド・ブームが起こった(前掲書『慶應義塾史事典』621頁)。なお、山本義俊訳『泰西修身論』(1873)、神鞭知常訳『修身学一名人の行道』(1873)などとしても邦訳出版された(三橋猛雄前掲書、149頁)。なお、ウエーランドについて、鎌田は以下のように評価している。「教科書を作ることが大分上手であつたらしい。元来ウエーランドは耶蘇教の僧で、このモラル・サイエンスなどは主としてバイブルに根拠して居ります。けれども心理哲学になると直ぐゴツトといふ訳に行かんから大分いろいろと科学的なことをいひ、また進んでロックやハミルトンの説を論じ唯心、唯物、無物心の説に就ての議論もしております」(150頁)。以下、本文中、注記がない引用部文の後に書かれている数字は、本書の頁数である。

應義塾の教師となっていた森下岩楠<sup>18)</sup>に伴われて入塾した。そこでは「テラーの万国史は須田<sup>19)</sup>さんが教え、ウエーランドの経済書を森下さんが教え、「ギゾーの文明史やウエーランドの修身学、心理学など」(149)が教えられた。このようにして「その時の塾の一等の級の書物まで全部習ってしまった」ので「卒業といふ訳です」(162)。ここに鎌田の「英学」修業は終わった。

しかし、「卒業するといふことが本当の学問を始めるといふこと」であるとの福沢の方針にしたがって、鎌田は「これまでの教科書として習ったものよりも、一層高尚なものを読む」こととなった。「その頃〈1870 年から 1880 年までの間〉日本ではトーマス・バククルが非常に流行して居ました」(168)。そこで、ウエーランドやギゾーとは異なり「奇抜な説」(169)を唱えていたバククルに取り組んだ。ウエーランドが「総てゴツドに帰省するような説ばかり」<sup>20)</sup>であったのに対して、「バククルの説はまるで宗教を否認した議論」であり、文

- 
- 18) 森下岩楠は、和歌山県海草郡出身で、1870 年入塾。初期の卒業生で慶應義塾教員、大分分校教員を務めた(丸山信前掲書『福沢論吉とその門下書誌』96-97 頁)。彼は経済学上の著作として『理財雑録 初編』(1880)や『経済原論』(1883)を執筆している。後者は、スミス、バベッジ、ジェヴォンズ、ウォーカーなどの諸説を日本の実例・法制・数字を用いて説明するなど、「訳述書としてではなく、著書としての経済原論の先駆の一つではなからうか」(堀経夫『増訂版 明治経済思想史』日本経済評論社、1992、49 頁)。
- 19) 須田辰次郎(嘉永 6 年-不明)は、豊前中津の出身で、入塾は 1869 年、初期卒業で、東京高等師範学校教員、時事新報記者、1885 年福岡豊津中学校校長。著書として『耶蘇教排撃論』(津田純一との共訳、1882)がある(丸山信前掲書『福沢論吉とその門下書誌』95 頁)。
- 20) 鎌田のキリスト教への関心は、鎌田が卒業した 1875 年に刊行された福沢論吉『文明論の概略』におけるキリスト教排撃とその後の福沢によるキリスト教とりわけユニテリアンの受け入れと切り離しては考えられない。1875 年頃から福沢論吉はキリスト教への反発を強めており、1881 年 9 月の『時事小言』において、その激しさは頂点に達した。その直前の 6 月 14 日京都四條金蓮寺にて交詢社社員波多野承五郎、高木喜一郎他数名が学術講演会を行い耶蘇教を駁して信徒を罵倒し、本願寺から多額の謝礼が交詢社社員に支払われた(白井堯子『福沢論吉と宣教師たち一知られざる明治期の日英関係一』未来社、1999、30、38 頁)。さらに 1882 年の夏には「破耶の演舌会が四回も開かれ、一回は加藤政之助箕浦勝人鎌田栄吉その他が入浴して、耶蘇攻撃論」をやった(青山霞村『同志社五十年裏面史』からすき社、1931、89 頁)。この時のことを、鎌田は「京都でやった演説は宗教論で耶蘇排斥、耶蘇教は佛教に比べると余程浅薄なものだといひましたところ、それが京都で非常に受けました。……それは石上福壽が頻みに来たのです。その時の話しの中に暹羅の人は皆一旦坊主になるが、その暹羅の外務大臣に非常に仏教に造詣の深い人で、その人と耶蘇教の西洋の牧師と議論をした。ところがどうしても耶蘇教の牧師の方が割が悪かつたという話しをしたところが、それは非常に面白い話だから是非それをやつて呉れといひますから、それを京都でやった。福沢先生もその頃は耶蘇教を排斥して仏教を保護すると

明は「最初は総て天恵—自然の恵みを受けた所に或る程度まで進む」と考えられていた。それに対して「近世文明が斯の如く非常な進歩したといふのは、人間の精神から起つたもの」であり、その精神を構成する徳と智のうち、前者は「昔も今も同じ」であるが、「智といふものは時代と共に段々進歩」していき、それが「文明を進歩させる」(169)という主張であった。

さらに「ミルの経済論……代議政体論……自由論……自伝……デスカッション・エンド・デイサテーション<sup>21)</sup>」を読んだ。鎌田の『デスカッション』への興味は、「人間の既得権を尊重しなければならぬとか、又人の権利といふものを国家の権力で以て殺いでしまうことはいけないといふ」記述へ向けられた。その一例が、イギリス陸海軍における官職の売買という「バツチエ・システム〈purchase-system〉<sup>22)</sup>」であった。鎌田が目じたのは、「個人の権利を尊ぶ」イギリスでは「単に一片の法律を以て廃止」<sup>23)</sup>できないという議論の存在であり、その例に「対照して考へて見ても色々な議論が起つて来る」のが、明治初期に中央集権的に実施した「大名の領分の奉還」や「士族の禄の奉還」であるという。

---

いふやうな傾きでありましたが、後には先生もそうではなくなつた。それは考が僻して居るといふようなことをいつて居られました(前掲書『鎌田栄吉全集』第1巻、222頁)。ところが、1884年にロイドが来日し、津田仙(メソヂスト)宅で住むようになり、福沢も6月になると「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」(『時事新報』1884年)を書いた。これについて津田は「私は友人の一人として……(福沢に)変化が起こつたのです。彼はキリスト教の信者になったのではありませんが、彼はキリスト教に好意的になったと宣言したのです。……彼の友人として大変うれしく思いました……。〈彼を〉キリスト教の友、と呼ぶことはできるでしょう」(7月22日ショー宛書簡：白井堯子前掲書、127頁)。

- 21) 正しくは、*Dissertations and Discussions: political, philosophical, and historical* (2 vols., 1859)である。なお、その他、鎌田は小幡が演説館で行ったミルの *Three Essays on Religion* (1874) についての講義を聞いている。小幡は本書を『宗教三論』(1878)として邦訳出版しており、その序を福沢論吉は書いている(杉原四郎『増訂版 ミルとマルクス』ミネルヴァ書房、1967、245頁)。
- 22) この purchase-system については、青木栄一『シーパワーの世界史1—海軍の誕生と帆走海軍の発達—』(出版協同社、1982)を参照のこと。なお、この点については大阪学院大学の根無喜一教授のご教示を得た。記して感謝の意を表します。
- 23) 19世紀イギリスにおける地方分権については、井上琢智『ジェヴォンズ思想と経済学—科学者から経済学者へ—』(1987、日本評論社)第7章「ジェヴォンズの応用経済学」の「都市自治体改革法」「実験立法」を参照のこと。

この他、鎌田は当時の流行にそってスペンサー (H. Spencer, 1820-1903)<sup>24)</sup>、ベンサム (J. Bentham, 1748-1832)、トクヴィル (A.C.H.C. de Tocquville, 1805-59)、そして彼ら「スペンサーでもミルでも皆〈が〉……根拠に置いて居る」コント (A. Comte, 1798-1857) をも読んでいる。

## II 慶應義塾における経済学教育・研究

1907 (明治 40) 年、慶應義塾創立 50 周年を祝う理財学会で鎌田は塾長として慶應義塾における経済学教育・研究<sup>25)</sup> の変遷について講演した。この講演<sup>26)</sup> は、一方で慶應義塾における経済学教育・研究の歴史であると同時に、鎌田による経済思想史観を示すものとして興味深い。

鎌田は、まず、慶應義塾における経済学教育・研究の 50 年を 3 期に分ける。「最初の十年間と中間の廿年、最近の廿年」である。「幼稚時代は未だ経済学には何等の関係もない、経済学研究はないのである。而してその以後の二十年は甚だ漠然たる形に於て経済学の研究を有つてゐる。最後の二十年は最も一とは

24) 鎌田が挙げているスペンサーの著作は以下の通りである。*Social Statics* (1851: 井上勤『女権真論』(第 16 章の訳))、*First Principles* (1862: 松本清寿・西村玄道訳『万物進化要論』1884 (第 12~17 章)、山口松五郎訳『哲学原理』1884 (第 1 部))、*Principles of Biology* (1864, 1867)、*Principles of Psychology* (1870-72)、*Study of Sociology* (1873, 1874 (3rd))、*Principles of Sociology* (1874-75, 1879-85, 1885-1896: 大石正巳『社会学』(第 1~10 章の訳))、*Principles of Ethics* (1897, 1891-92: 山口松五郎訳『道德之原理』1883)。なお、日本におけるスペンサーの影響については、山下重一『スペンサーと日本近代』(御茶の水書房、1983) を参照のこと。山下によればスペンサーがアメリカを訪問した 1882 年には、山口松五郎訳『社会組織論』(*The Social Organism*, 1860)、同氏訳『刑法原理獄則論綱』(*Prison Ethics*, 1860) を含め 5 点が、さらに明治憲法発布までに 27 点が邦訳され、まさに日本でも「スペンサー・ブーム」が起こった (5-6 頁)。『国立国会図書館蔵書目録-明治編、著名索引』(1995) によれば、スペンサーの著書の邦訳として 41 点が、12 点の原典の文献の所蔵が明記されている。なお、スペンサーの死後編纂された『哲学雑誌』(1904 年 4 月号、追悼号) では、この『生物学の原理』が丘浅次郎によって取り上げられている (220-21 頁)。

25) 慶應義塾教員としての鎌田が具体的にどのような教科を担当したかについての情報はほとんど知られていない。例えば、慶應義塾の経済学教育研究を明らかにした慶應義塾大学経済学会編『日本における経済学の百年』(全 2 巻、日本評論社、1959) や『福澤先生没後百年記念 慶應義塾の経済学』(慶應義塾図書館、2001) にも鎌田の教育研究活動の具体的内容についての言及をほとんど発見することはできない。例外的に、「先生の英書の講義がまた能弁で、ウルシーの国際法の講義」(25 頁) をしたとある。

26) 前掲書『鎌田榮吉全集』第 1 巻、265-78 頁。

いへないがまづ正確なる、大に発達したる形に於て経済学の研究を有つて居る」(266)と。

彼によれば「安政5(1858)年に鉄砲洲に福沢塾が開けたといふ時には、とても経済などといふことは書物を見たこともなければ、又有つたところが多くのは恐らくは読むことも出来ない。而して王政維新、明治元年頃になると大分英書を読む力が出来て来て、稍々むつかしい物を解することが出来た。それは人々に依つてABCを習つて居る人もあれば、大分むつかしい書物を読んで居る人もあつたから個人としては違ふ。然しながら慶應義塾を一の団体として考へたときには、或程度の書物を読み或程度の学理を解することの出来る能力は持つて居つた。彼の上野戦争(1868)の砲烟の揚るのを見つゝ始めてウエーランドの経済論を開講したといふ、この時が即ち始めて塾に於て経済書を読んだ、これが即ち日本に於ける経済学の濫觴である。経済学の研究を始めた初日である」(266)と。

慶應義塾で使われたと鎌田が指摘した最初の書物がウエーランド(F. Wayland, 1796-1865)の『経済学』(*The Elements of Political Economy*, 1837 小幡篤次郎訳『英氏経済論』1877、全9巻)<sup>27)</sup>であった。彼によれば本書は「アダム・スミス(A. Smith, 1723-90)、リカード(D. Ricardo, 1772-1823)、セイ(J. B. Say, 1767-1832)の三大家の説を根拠として学生と実業家の為に豊富なる例証を示し、當時の米国に在つては斬新なる著述として激迎されたもの」であり、「経済書編纂の順序は生産、交易、分配、消費」<sup>28)</sup>の「順序を迫うて論

27) 藤原昭夫『フランシス・ウエーランドの社会経済思想』(日本経済評論社、1993)を参照のこと。

なお、『慶應義塾の経済学』(池田幸弘・三島憲之解説、慶應義塾図書館、2001)は、藤原の前掲書を参照する形で「道徳論的・処世訓集成的色彩が濃厚であること、イギリス古典派経済学に見られるような *dismal science* 的な要素が払拭され、未来に対して楽観的な『明るい経済学』であったこと、自由主義的な経済論を基調としつつ、厳しい条件付きながら政府の経済活動への介入を容認していること」が明治初年に「ウエーランド・ブーム」と呼ばれるほどの人気を博したと指摘する(vi)。

28) この分類は、セイの『経済学概論』(1803)の副題が示すように経済学を富の生産・分配・消費の一般的過程を論じる学問と捉えるものであり、交換を入れるなどをして、ミル親子、マカロック、シーニア等のイギリス古典派経済学者に取り入れられた(経済学史学会編『経済思想史辞典』丸善、2000、226頁)。

じて居る」と指摘し、それゆえ「経済思想皆無といふ日本人」が「驚嘆したのも無理はない」(266)という。だからこそ「ウエーランドの経済書といへば一番むつかしい書物、最も高尚なる書物、書物の形を見ても尊敬の念が起るといふやうな大変なものであつた」(267)。その中で「一番むかしい」例が「バンキング」であつたという。ここまで読んでくると「誰が読んでも分からぬ」ものだというのが「学生間の説」であつた。というのは、「日本には両替屋とか為替という位のことがあつたが、西洋の銀行の仕組に至つては殆ど考も及ばない」(266)からだという<sup>29)</sup>。

第二に取り挙げられたのは「セニオル氏の書いた小さな経済書」で「慶應義塾の出版局で日本の紙へ印刷して日本綴の本」『経済略説』(1869)であつた。この本について鎌田は「ウエーランドとは大分趣が違って、あまり順序を正さずに極く通俗に婦女子が読んでも能く判るやうな工合に書いた書物、これも教科書として用ゐられた」ものであるという。

第三に取り挙げられたのが「大分むつかしい書物」であるミル(J. S. Mill, 1806-73)の『経済論』(*Principles of Political Economy*, 1848)である。これは「大変なもの」で、これを「一冊読まうものならば天下を治むることは何でもないといふ位ゑらいもの」であり、これは政治家の『六韜三略』<sup>30)</sup>のようなものであり、それは日本だけでなく、この時代の「西洋でも同じこと」で、実際「今日の英国の有名な政治家などといふものは大抵このミルの経済論によつて育てられた」(267)<sup>31)</sup>。

第四に取り挙げられたのが、このミルの『経済学原理』を「やさしく書いた

29) しかしながら、国立銀行条例が制定された明治5年以降、国立第一銀行の総監役浅沢栄一と彼の指導する「摂善会」(1877年設立)らの努力、さらにはW.S. ジェヴォンズの *Money and the Mechanism of Exchange* (1875) などの邦訳(津田東訳「博士ヂェボンズ氏著通貨論 中信憑ノ部」1878)の出版によって急速にこのような状況は改善された(井上琢智『黎明期日本の経済思想—イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化』日本評論社、195-200頁)。

30) 『六韜三略』は、『六韜』と『三略』のことである。前者は周の太公望の撰と称する兵法書であり、後者は上略・中略・下略の三巻からなる黄石公の撰と称される兵法書であるが、後代の偽作とされる。ともに中国兵法の古典である(新村出編『広辞苑』岩波書店、第6版初刷、2008、2942頁)。

31) ケインズは「ミルの『経済学原理』とマーシャルの『経済学原理』との間の、長い空白期間」(272頁)の存在を認めた。マーシャルが「経済学の研究を始めたとき(1867)には、ミルとリカード

もので主義に於て全然同一」であったフォーセツト (H. Fawcett, 1833-84) の『経済論』 (*Manual of Political Economy*, 1863) で、それは教科書として採用された<sup>32)</sup>。

第五に取り挙げられたのが、「亜米利加のチャールス・ケーレー (H. C. Carey, 1793-1879) の『ソーシャル・サイアンス (Principles of Social Science, 1858-59)』で、これは「全くミルの説などを駁撃した極端なる保護主義」を唱えた教科書である<sup>33)</sup>。

その他、慶應義塾で経済学の教科書として用いられたのが、ボーエン (F. Bowen, 1811-90) の『経済論』 (*Principles of Political Economy*, 1856)<sup>34)</sup>

---

ウとが依然として最高の、挑戦をゆるさぬ勢力を振っていた」(大野忠男訳『人物評伝』ケインズ全集第 10 巻、東洋経済新報社、1980、242 頁) と書いたように、ミルの『経済学原理』は、ヨーロッパの経済学界ではゆるぎない地位を築いていた。その点では、経済学の輸入国であった日本でも、ミルの権威は同じであった。なお、リカードウの日本への導入について、堀は「明治年代に彼の『経済学原理』は邦訳されなかったが、彼の通貨および銀行論は早くから知られていた。例えば、明治 9 年発兌の『銀行実験論』(紙幣寮蔵版) のなかには彼の所説が引用されている。また、彼の通貨などに関する諸論文は明治 34 年に次の表題でわが国において翻刻されている *Essays on Finance by David Ricardo*. Edited by C. S. Griffin, A. M. Prof. of Political Economy and Finance, Imperial University of Tokyo, 1901.」(堀経夫前掲書、98 頁)。

- 32) H. フォーセツトは、ケンブリッジ大学で学び、数学のトライボスを終え、フェローとなった。1858 年に銃の事故で失明した。1863 年同大学経済学の最初の有給教授ポストに就き、65 年から自由党の下院議員となった。本書は、ミル経済学を拡充し、古典派経済学の大衆化という役割を果たした。死後、このポストにマーシャルが継いだ (前掲書『経済思想史辞典』326 頁)。
- 33) ケアリーは家業の出版業を手伝うかわら英仏の経済学書に学び、42 歳で *Essay on the Rate of Wage* を著し名声を博した。彼はリカードウやリストらの地域間・国際間農工分業論を批判し、スミスの地域内農工分業論を主張した (前掲書『経済思想史辞典』103 頁)。 *Principles of Social Science* の邦訳 (正確には、Kate McKean による抜粋版 *Manual of Social Science* (1864)) は、犬養毅により 1884 年から 88 年にかけて全 4 巻の『圭氏経済学』として出版された (49-50 頁)。彼の「国民主義的経済学はわが国に早くから知られており、かの自由主義経済学に対抗するための有力な武器としてわが国の保護主義経済学者によって援用されていた (前掲書『経済思想史辞典』241 頁)。
- 34) ボーエンの『経済論』とは、 *Principles of Political Economy* (1856) のことである。彼はケアリーの「後継者の一人であって、彼の書物は明治初年にわが国において翻かっていたことは、若山義一がこれを語っている」(堀経夫前掲書、233-34 頁)。彼の『保護税説』(1871) によれば「保護政策を主としたる書類にても傑利のは大部に過ぎ、私密斯 (外務省に昨年まで雇入れられたる人なり (E.P.Smith)、越児土尼 (W. Elder) のは高尚に過、貌奄のは偏

であり、ゼボン (W. S. Jevons, 1832-82) の『経済論』 (*Primer of Political Economy*)<sup>35)</sup> であり、いずれも「教科書として最も宜しい書物」であるという。さらに、鎌田が取り挙げた教科書としては、ゼボンの『貨幣論』 (*Money and the Mechanism of Exchange*, 1875)、バゼヲ (W. Bagehot, 1826-77) の『ロンバート街金融論』 (*Lombard Street: A Description of the Money Market*, 1873)<sup>36)</sup>、ギルバート (J. W. Gilbert, 1794-1863) の『銀行論』 (*Currency and Banking, A Review of Some of the Principles and Plans that have Recently Engaged Public Attention, with Reference to the Administration of the Currency*, 1841)<sup>37)</sup>、ウオカー (F. A. Walker, 1840-97) の『金融論』 (*Money*, 1878) がある<sup>38)</sup>。

しかし、注目しなければならないのは、これらの経済学書はあくまでも「西洋の書物を読むことが注意になつて居」り、その点で経済学の教育・研究のために読むわけではないのであり、あくまでも「地理、物理、歴史、倫理、心理、政治等の書物と相前後して」読んだに過ぎず、あくまでも「これだけのむつか

---

する所あり……」として批判し、J. B. Byles の *Sophisms of Free-Trade and Popular Political Economy Examined, By a Barrister* (1849) を評価した。若山はこれを『自由交易穴探』(1877)として出版した(前掲書『経済思想史辞典』200頁)。

35) ゼボンの『経済論』、『貨幣論』の邦訳史については、井上琢智前掲書(181-202頁)を参照のこと。両書とも明治初期の日本にあつて経済学入門として、また、日本の幣制の確立に大きな役割を演じた。

36) バジヨットの『ロンバート街金融論』は、1883年小池靖一講述『英国金融事情』として邦訳されている(堀経夫前掲書、94頁)。

37) ギルバートの『銀行論』については、二階堂達郎「J. W. ギルバートの銀行論」(『大手前女子大学論集』第32号、1998、179-89頁)、「J. W. ギルバートの自由銀行論について」(『金融経済』第220号、1987、19-54頁)を参照のこと。また、「銀行の良否=預金の仕方=通俗財話」(『東京朝日新聞』1923年2月18日)によれば、「預金者として銀行の選択につき注意すべき点」の一つとして「銀行経営者の資格」を挙げ、その資格については「ギルバートの銀行論や井上日銀総裁の意見」を聞くことをもとめている。このように、ギルバートの銀行論は、日本においても市井で一定の役割を果たしていたのであろう。

38) ウオカーの *Political Economy* (1883) が栗田宗次・山本淳吉訳述『欧氏経済論』(1898)として、また、*Brief Text-Book of Political Economy* (1886) が嵯峨根不二郎訳『応用経済学』(1890)として邦訳されたが、『貨幣論』(*Money*, 1878)は邦訳されなかったようである。しかし、天野為之『経済原論』が書いているように「ジェヴォンズの貨幣論と共にわが国において読まれていたことは明らかである」(堀経夫前掲書、100、55頁)。

しい書物でも読めるやうにならうといふのが目的であつた」。しかし、中には「経済学に精通して見たいといふ篤志の人」おり、彼らの場合には「この教科書の外に珍しい経済書があれば読んで見る」(268) ことがもちろんあつたという。

このように鎌田は、当時の慶應義塾で主に教科書として用いられた経済学書を紹介してのち、具体的な経済思想史を展開している。

### III 鎌田の経済思想史

#### 1) F. Wayland, *The Elements of Political Economy*, 1837

##### (1) 重金主義

最初に取り挙げられたのが、「ウエーランドの経済学書中で屢々引証せらるゝアダム・スミス」によって「破壊」された「マーカンテリズム即ち重金主義〈ブリオリズム〉」<sup>39)</sup>である。鎌田は、この重金主義が「欧羅巴列国間に絶え間の無かつた戦争」の原因であると指摘する。なぜなら「黄金を以て唯一の富と考へ、何でも国を富ます為には外国から金銀を取つて来るより仕方ない」ので、「自国に金山や銀山があればそれを掘り起こせばよいけれども、金銀山がない国ならば外国貿易に依つて金を得るより仕方がない」ので、「自国で造つた物品を外国へ輸出して、その代価の金銀を取つて来さえすればよい」と考え、それを政策として採用したために「互いに無理な事」となつて「常に葛藤を生じ戦争になつた」という。この重金主義を批判して、自由主義を主張することで「遂に歐洲の天地に平和の曙光」をもたらしたのが A. スミスであつた。

##### (2) 重農主義

「日本は元来あまり金の国ではなく米の国であつた。士族の禄は何石何人扶

39) 「マーカンテリズム」をたんに「重金主義」とする解釈については、現在の経済学史的な研究からすれば、不十分だという指摘をすることは可能であるが、当時の大航海の時代の一つの特徴を鎌田が鋭く指摘していると評価できるであろう。今日、重商主義の経済理論としての貿易差額説は、①個別的貿易差額説、②総体的貿易差額説、③差額のプラスの効果を金銀の獲得ではなく、国内での就業量の増大とする就業差額説とに区別されることがある(小林昇、杉原四郎編『新版経済学史』有斐閣双書、1986、12頁)。

持、大名は何万何千石とかいうようなことで米が半ば通貨の働きをしていた」だけでなく、「物価の標準」とさえなっていた。それゆえ金銀はたんに「貿易の媒介」としての役割しか果たしていなかった。それゆえ、「貨幣其物が資本である」というような観念はあまり深くなつて居らぬし、その点で「欧羅巴ほど進んで居らぬ、複雑になつて居らぬ、社会が幼稚であつたが為に経済の真相が全く蔽はれずに居た為に、俗人も学者も重金主義の誤謬に陥ることが浅かった」として、重金主義の誤りを指摘しながらも、日本経済が「幼稚」であったために、重金主義の誤謬を避けることができたとの認識を示した。

このことは、逆に「反対の重穀主義といふか重農主義といふか、恰も仏国のヒジオクラットの如き思想が日本人の頭を支配して居た」という。その上で鎌田はこの思想を太宰春台（1680-1747）の『経済録』（1729）や頼山陽の『錢幣論』<sup>40)</sup>に読みとるだけでなく、それらの思想のルーツが漢思想の『尚書』の『洪範』や漢書の『食貨志』などにあると考える<sup>41)</sup>。というのは、ヒジオクラットが「日本人の耳には……平気に入つた」のは、日本が未だ「封建時代の単簡なる社会に居つた為に外ならない」からであった。このように、ヨーロッパにおける「マーカンティリズム→ヒジオクラット」の流れを歴史の発展段階ととらえ、日本が「マーカンティリズム」に毒されず、「ヒジオクラット」に慣れ親しんでいたのは、日本がヨーロッパに比べて遅れており、未だ封建時代

40) 『経済録』は「労働が商品化されている状況を前提」に「自然経済への復帰が目指され、欲望の制限＝『礼楽』の復活強化による体制再建の方向が示された」著書である（杉原四郎・逆井孝仁・藤原昭夫・藤井隆仕編著『日本の経済思想四百年』日本経済評論社、1990、94頁）。また『錢幣論』は、頼山陽『通議』の一部で「上」「下」2編からなり、「通貨政策の……基本理念」を「民利」に求め、「貴穀賤金主義を取る」ものである（徳田進『頼山陽の社会経済思想』芦書房、1971、372-73頁）。なお、原文は頼山陽先生遺跡顕彰会『頼山陽全書』（中巻、「通議」巻之二「論 錢貨 上」〈67-70頁〉、「論 錢貨 下」〈70-74頁〉、1931-32）に収められている。

41) 『尚書』の『洪範』は著者・出版年も不明であるが、主に中国古代の統治階層の政治哲学理論を書いたもので、皇帝権力・神を核とする中央集権的な専制理論を論じたものであり（斉明山「中国历代王朝の行政大法—簡析《尚書・洪範》」『北京行政学院学報』2000、第4号）、『食貨志』とは、班固（西暦32-92年）の著で、出版年は不詳であるが、中国西漢時代の経済社会を記述したもので、上編が「食」を、下編が「貨幣」を扱い、「足食・安民」の考え方を示した（班固『漢書・食貨志』北京中華書局出版、1983）。なお、これらについては藥玉壘氏（関西外国語大学非常勤講師・関西学院大学国際学部非常勤講師）のご教示を得た。記して、深く感謝申し上げます。

にあったためであるというのが鎌田の認識であった。

このように鎌田は「マーカンテリズム」、重農主義、スミスの自由主義学説をたんに解説するだけでなく、それらの経済思想をヨーロッパの歴史の文脈で理解し、さらに進んでそれらの学説を日本の歴史の文脈でも理解するなど、優れた歴史的感覚の持ち主であった。

## 2) J. S. Mill, *Principles of Political Economy*, 1848

次に取り挙げたのが J.S. ミルである。鎌田は、ミルは「なかなかゑらい」(270) し、「この人はアダム・スミス、リカード、マルサス等先輩の説を秩序的に祖述してこれを実際政治家の参考に供せん為」のものであるとして、『経済学の原理』の「体系性」だけでなく「実践性」を強調し、加えて「当時在つては英国は勿論、欧羅巴を全体にもゑらい感化力を及ぼし、日本人にも非常な感化を與へた」し、「慶應義塾は大にこの人に感化されたものである」。しかし、ミルが「実践性」を重視したがゆえに、鎌田にとって「今日から見るとその説の時勢に適さざるところあるは当然」であるばかりではなく、「今日ではまるで誤謬論の間屋のようにいはれてゐる」おり、それだけでなく、「経済学の思想が纏つて伝播されたからである」という。

それはなぜなのであろうか。ミルは一般的に「純然たる個人主義の忠実なある代表者」であり、「財産私有制度の最も強き主張者」であると評価されているが、鎌田によれば、「私共は決してさうは思わなかつた」。なぜなら、「比較的この人はその論調に社会主義の傾きを有つて居る」。それは、『自叙伝』を読むと、そこでは「少年の頃仏蘭西に遊んだ時に、社会主義者サン・シモンの家に逗留しシモン先生の社会主義を聴<sup>42)</sup>き、『経済学原理』の中で「生産と分配とは大いに趣を異にし生産には天然の法則あるも分配は純然たる人為の制度

42) 「私は、彼〈セー〉の家に滞在していた間に、さまざまな注目すべき人々に会った。その中でも楽しい思い出は、一度サン・シモンにあったことであるが、彼は、哲学と宗教のどちらについても創始者ではなく、頭のよい変人<sup>4)</sup>としか見做されていなかった」(山下重一訳注『評注 自伝』御茶の水書房、2003、96-97頁)。このように彼が逗留したのは、サン・シモンの家ではなく、セーの家であつたし、サン・シモンに会つたのは、この時(15歳)だけである。

習慣に依るものなれば<sup>43)</sup>、第一財産の事の如きは必ずしも現在の如く私有制度の外に趣向のない訳ではない、即ち共産主義社会主義の如きも今日からいふと、いふべくして行はれない空論のやうであるけれども必ずしもさうでない」として、「財産私有個人競争といふ方を常態として社会が組織せられ、その私有財産制度に伴ふところの便利といふことが大いに発達し」(270) ており、他方、「共産主義社会主義の方は只議論のみで毫も実地の経験を経ざる……空中楼阁の空論で到底行はれない」(270) ように考えているが、「必ずしもさうではなからう」(271) と指摘する。この指摘は、明らかに鎌田がロシアを含む共産主義・社会主義運動の当時の高まりを意識しての発言であろう。それではなぜ鎌田は共産主義社会主義を否定するのであろうか。彼によれば「その方の世に中になれば人の心から変つて来るから」(272) だという。

ミルが共産主義・社会主義への道の可能性を拓いたものの、鎌田によれば「常識に豊富あるミル先生は結局私有主義を離れず私有主義を保存し乍ら成るべく現在の不公平を直す」ために「労働者の地位を上げ幸福を増さうとして」、「相続法も租税法も資本と労銀の関係」をも見直したのである。

この点について、三宅雪嶺は「日本も英語にて世界の知識を吸収せる間、自由主義を主として、社会主義に興味を感じず、ミルの経済学を通じ、幾許か之を彷彿せるのみ。其の経済学は盛んに行はれ、一時経済学といへばミルに限りたるが、ミルの初版にて社会主義に反対し、次に稍々緩和し、更に強調の傾向

---

43) 『試論集』(1844) では見られず、『経済学原理』(1848) で登場したミルの生産・分配二分法は「古典派の視野を大いに拡げて資本主義以外の経済諸制度をその理論内部にとり込み、とりわけ私有財産制度を真正面からとりあげて社会主義者たちと共通の理論的土俵で論じ合うという姿勢」(杉原四郎『杉原四郎著作集—自由と進歩 ■ J. S. ミル研究 ■ 一』Ⅱ、藤原書店、2003、397頁) にいち早く鎌田が目し、私有財産制と社会主義・共産主義との選択可能性に着目したのは、当時としてはきわめて新しいミル解釈であろう。なお、マルクスは『剰余価値説史』(1905-10) の中で、この点を評価して、ミルを「批判的経済学者」として紹介しているが、鎌田が『剰余価値学説史』からこの見方を得たとは考えられない。なお、堀経夫「明治初期の思想に及ぼした J. S. ミルの影響」(堀経夫編『ミル研究』未来社、1960、175-202 頁〈この論文は、以下の堀の著書に再録されている。堀経夫前掲書、367-81 頁〉) では、この点を指摘している日本の経済学者については言及されていない。なお、この問題については、井上琢智「J. S. ミルにおける『自由・必然』問題と『生産・分配二分法』問題—『論理学体系』第 6 巻と『経済学原理』—」(『関西学院大学経済学研究』第 7 号、1974 年 11 月、73-86 頁) も参照のこと。

を帯び、日本に入れるのは強調の傾向あり、全部の読者は多少動かさるゝなきを得ず。但だ読者は概ね普通に経済の題目とする所に注意し、社会主義の如きは軽々看過し去れり。されど社会主義が夢と考へられたる時、相当の論拠ありと思はれたるは、ミルの媒介に依ること少からず<sup>44)</sup>と指摘している。鎌田の場合もまさにその一例といえる。

私有財産制度を前提としている「ウエーランド教科書を金科玉条と信じてきた学生」はミルの思想に触れることで「頭には一大変革を起こさざるを得ぬ」という。なぜなら、その私有財産制度は「官民共に西洋の文明流」と信じ、地租改正によって「何でも地面は御上のものであつたのを政府が地券を下附して土地私有の法を行つた」(271)ばかりの日本において、その私有財産制度をミルは「人為の制度の習慣」(270)であり、それゆえその可変性を容認していたからである。それどころか、ミルは「地面を面々〈一人一人〉が私有するといふことは甚だ不道理」であり、「土地は元來天然固有のもので人力を以て製造し得ない」ものであるがゆえに、「全体個人が私有するものでない、殊に限りある物を個人に占領せしむる筈はない」し、「私有制度は各自がその労力に依つて得たものを所有する」という原則から生じたものであるとすれば、むしろ「土地だけは国家が有つ方が常然であると書いてある」とすら指摘し、その事例としてインド省の役人であつたミルがその「印度は土地は官有」であり、むしろ「その仕組が大に理屈に合つて居ると」(271)と論じているからである。

しかし、鎌田はこのようなミルの主張を解説するにとどまらず、さらに進んで「ミルの真意」を明らかにしようとする。ミルのこのような主張の背景には「英国に於て貴族富豪が土地を兼併するの害を除きたい」というミルの大農制度批判があると指摘する。というのは「大陸各国の小農の有様」と比較して、イギリス農業の生産性の劣る原因をこの大農制に求め、それゆえ農業の生産性改善のためには「農夫自ら所有しなければ良くならぬ」として小農制を採用すべきだというのがミルの真意であると結論する。

さらに鎌田は、明治期の日本が直面した自由貿易・保護貿易論争にも言及す

44) 三宅雪嶺『同時代人』第4巻、(1949)1979、岩波書店、201-02頁。

る。ミルは「無論自由貿易」論者であるが、「然し保護貿易は絶対に悪いかといふと必ずしもさうでない」と指摘し、「將に興らんとする新進の国に於ては保護を用ゆるべき場合」(271)もあるが、「然し永久の保護を爲すに至つては只無意味なるのみならず大に有害であると論じて、本然の自由貿易論に帰着」しているという。このように鎌田によれば、ミルは「要するに非常に多方面な墨者、必ずしも一方に拘泥せぬ」が、しかし「その中にも固有の主義を失はぬ」姿を見る。鎌田は「何にせよ、先づ大変な大先生には違ひない」と高く評価する。

重要なことは、ミルのこのような主張の根底に「終始セーテリスパリビス〈*ceteris paribus*〉即ち他の物が同一としたならば斯うだといふ」論理が横たわっていることに鎌田が注目していることである。もっともこのような論法について、鎌田は「論理上仕方ないこと」<sup>45)</sup>であるものの、「あまりアテにならぬやうな心地がする」し、「英国を標準にして経済を読むのか」それとも「世界を標準にして説くのかちつとも判らぬ」(272)と不満をもらしながらも、結局は「批評眼を以て読んで見る」ことが重要だと鎌田は理解することになる。

### 3) H. D. Macleod, *The Element of Political Economy*, 1858<sup>46)</sup>

その「批判を助ける書物」を書いたのが、「矢張り自由貿易の経済学者で英吉利」人の「マクレオツド」(H. D. Macleod, 1821-1902)であるという。鎌田はマクラウドの「ミルは大変間違つたことを論じて居る」との指摘に注目す

45) このように鎌田が「論理上仕方ないこと」であるものの、実践上は「あまりアテにならぬやうな心地がする」と指摘し、「論理の正しき」よりも、政策への有効性に大きな関心をもっている。だからこそ、日本が進む際に「英国を標準」とするのか、「世界を標準」とするか分からないと嘆くのである。政治家鎌田の特徴の一つである。

46) 本書の原典は *The Principles of Economical Philosophy* (1872-75) であり、*The Element of Political Economy* (1858) の第 2 版であり、第 3 版は、*The Elements of Economics* (1881-86) である。なお、堀によれば、「彼を有名ならしめた書物は銀行や通貨に関するものである」(堀前掲書、96 頁) という。具体的には、*The Theory of Practice of Banking* (1855-56) は銀行の信用創造力とその過程を最初に明らかにし、また、*The Principles of Economical Philosophy* (2nd ed. 1872-75) は、田口卯吉翻訳、有賀長雄校閲『麻氏経済哲学』(1885, 1887) として、邦訳された。さらに *The Theory of Credit* (1889-91, 2nd ed. 1893-97) は、後藤博見、藤田静、伴直之助、乗竹孝太郎、金谷昭訳『銀行論』経済学講習会 (1883-90) として刊行されている (堀経夫前掲書、53 頁、前掲書『経済思想史事典』376-77 頁、三橋猛雄前掲書、621 頁)。

る。マクラウドによれば「経済学史はこれを3期に分つて、フイジオクラットを第一期学派とし、アダム・スミス、リカード、マルサス、ミルを第二期学派とし、コツジャツクといふのは佛蘭西の学者で古いのでありますけれども論が新しいから新しい方の部に属する、そこでコンジャツク〈E. B. de Condillac, 1714-80〉、バスチエー〈C. F. Bastiat, 1810-50〉、シャーマル、ペリー〈W. Paley, 1743-1805〉を第三期の新派」(272)とに分け、マクラウドはこの第三期の「説を自家の立脚貼」としていると鎌田は指摘する。その上で「第二派即ちアダム・スミス、リカード及びマルサスの系統を受けたるミルを攻撃した」。攻撃されたのは、ミルの国際価格論、リカードの地代論、マルサスの人口論だけでなく、さらにスミスに及ぶ。

スミスは「経済学の元祖といふけれどもそれ程大したものでない。スミスは論理学倫理学の教師で経済学の方はあまり知らない方だ。佛蘭西に行つた時ケネーに就いて経済の説を聞いて重金主義の非を悟り帰国の後富国論を著してケネーに書を送り、この著書は足下の著述といつても宜しいといつて居るといふやうな訳。そこで経済学も必ずしもアダム・スミスの専売特許でもないといふところからミル、リカード、アダム・スミスの尊信も余程薄らいで來るといふやうな訳」だと。とはいえ、鎌田は、このマクラウド説に納得したかといえ、彼は「甚だ面白くない。ごく偏僻なところもあるやうに感じた」(273)と批判する<sup>47)</sup>。

#### 4) H. C. Carey, *Principles of Social Science*, 1858-59

マクラウドに続いて扱われたのは、「チャールス・ケーレー」である。「これは極端なる保護貿易論者であつて、自由貿易を根柢から破壊せんと勉めた。英吉利派の経済主義を罵倒し、リカードの地代論収穫遞減説、マルサスの人口論を罵倒し」、「この系統を受けたるミルは激しく罵倒されてしまつた」(283)。

このように「英派経済学者の説に従ふ時は人類の将来は全然絶望である」ということになるが、ケアリーによれば「決してそんなことはない」。「第一にマルサスの人口繁殖論は間違つている。人類の食物は下等動物と植物とである。

47) 鎌田は、マクラウドの「偏僻なところ」については具体的に何も指摘していない。

この動植物は最高等動物たる人類よりは繁殖が早く進むのが生物学の定則」だからである。鎌田は、この見解を補強するものとして「近頃出版せられたハーバード・スペンサーの生物哲学」であり、そこでは「人類が益々進歩して益々精神的の労力を増すに従つて生殖力が減退する」と主張されているからであると、鎌田は補足説明をする。第二に「リカードの地代論に反対」した理由を「最初人間が耕す地面といふものは悪い地面を耕す、何となれば豊饒は土地は大抵森林か沼地になって居た。その森林沼地を資本もなければ器械も無いという時代には森を伐倒して畑にしよう、沼を乾かして田にしようといふことは出来ぬ、まづ最初は差当り草の生へて居る処に芋や豆を植ゑるとというのが段々に資本が出来て来る道具も出来てくるといふことになる、それで漸く樹木を伐倒して畑にする」(273-74) ように「瘦地より次第に沃土に進む」。これは「リカードのいふのとは全く反対である」と。このように鎌田によれば、リカードウの収穫逓減論とマルサス人口制限論とは、ケアリーによって「一顧の値もなき愚論なり」として排斥せられた。

このようなケアリーの議論を要約してのち「この人は絶対的の保護貿易論者で、貨幣の議論に就ては重金主義のマーカンテリスト」(274) だと評価する。その上で「要するに我々学生のこれまで信仰したるミル一派」をケアリーが攻撃している点を鎌田は「中々面白い」と考える。というのは、ミル一派は「歐洲の古国」故に「謬論」を犯し、ケアリーは「亜米利加」故に「誤謬」を犯すなど、ともに「極端なる境遇」を前提にしたために「謬論」を犯したと鎌田は考えた。そこで鎌田は「我々は一寸迷はされたけれども、少しく虚心平気に考へると双方に真理あり又幾分の誤謬説がある」とし、「結局学者の説もその境遇の感化を脱することは難しいもの」だという「大人らしい考え」に至る。

ケアリーの議論について、鎌田は「論理の立たぬ所が多く、また敵の説を故らに極端に解しては打叩くような不公平な態度があるから、自然これを信奉する者も少なかった」。それにもかかわらず、鎌田によれば「慶應義塾にも大分保護主義に興味を感じる人が出て独逸のリストやロツセルの如きもの位は読んだ」し「伊太利仏蘭西の保護論を読んだ人もある」(274) として、慶應義塾における保護主義の影響がケアリーから始まったと指摘している。

さらに「今日の独逸の国家主義経済論、又保護主義経済論」は「この米国のケーリーなど」に起源をもっていると鎌田は指摘し、その文脈からリストを鎌田は解釈する。「英吉利の経済学者は無暗に自由貿易論を唱へるが、英吉利も初はやはり保護主義で彼処まで進んだものである。自分が先に進んだもの」(274-75)であり、それゆえ「恰も屋根に梯子〈保護貿易〉を掛けて自分が登ったならば梯子を外すが一番得策」だと考え、「おれは〈イギリス〉もう屋根に登ったから外の者の上に上らぬように梯子を蹴倒してしまえ」というのがイギリスの立場であると考えた。それゆえ後進国は保護貿易を主張したリストを頼り、後進国でリストの祖国であるドイツでは、その保護貿易を起源として国家主義論が生まれたという。これを歴史的に支えたのがロツセル (W. G. F. Roscher, 1817-95)、クニース (K. G. A. Knies, 1821-98)、ヒルデブランド (B. Hildebrand, 1812-78) などの歴史学派であるという。「経済といふものは哲学として扱ふことの出来ないもの、理屈一片ではいかぬもの、国々の歴史に関連するから歴史的に事実に研究しなければならぬ」から「国々に依つて経済は違はなければならぬ」それが「国家経済学」なのであるという。鎌田はその上であらためてケーリーの保護貿易の起源を明らかにしようとする。その起源は「仏蘭西のkolbert (J. B. Colbert, 1619-83)」であり、その説が「亜米利加」へ行き、そして「独逸」(275) へ行つた。

##### 5) F. Bowen, *Principles of Political Economy*, 1856

「これは亜米利加の経済学者で……自由貿易主義」者であり、「ミルなどの流儀に倣つて保護貿易自由貿易の關係」を説明している。加えて、鎌田が目にしたのは、このボーエンによる「丁度日本当時〈明治 13・14 年頃〉の経済」問題で「維新後の大問題」であつた「紙幣の下落」の扱いである。鎌田によれば「西南戦争の時に紙幣を増発した、その結果不換紙幣の過剰」「金貨と紙幣との間に大きな打歩が出来て」「非常に困つて居つた」。加えて、「貿易の具合からこの打つ歩が昂低浮沈することが甚しく、「肝心の貨幣が激烈な浮沈をする」ため「商売は皆投機的になつて来」た。このような状況にあつて「真面目な者は商売も工業も止める外」なくなつていた。この事態の対応に役立つた

のが、ボーエンによる「南北戦争の時に亜米利加政府が増発したグリーンバック紙幣<sup>48)</sup>の始末」についての説明であった。これが鎌田によれば「大いに面白く読まれた」という。さらにボーエンの「漸次的定期的の不換紙幣消却論」が「大いに役だった」という。

#### IV 経済学における古典研究の重要性

慶應義塾における「大抵明治元年から 22 年即ちこの大学部を置き理財科を設くる迄」の経済学研究をこのように紹介した鎌田は、経済学への一般的な批判例を挙げて、その間違いを正そうとする。確かに、「昔のアダム・スミス或はリカード或はミルといふ如きは非常な豪傑、非常な大学者であるけれども今日から見ると随分間違つたこともあり、随分矛盾したこともあり、又馬鹿々々しいこともある」が、中には誤つた批判が存在するとして、その具体例を示す。

第一に、スミスへの一般的な批判の事例を取り上げる。その一つが「アダム・スミスの時には鉄道もない、蒸気船もない、電信電話といふものは無論ないといふやうな時に書いたもの」を「今の頭で斯う間違つて居る」との批判である。これに対して、鎌田は「随分酷な話である」(276)として、逆に古典を理解するに際して歴史的文脈を考慮しなければならないことに注意を喚起している。

さらに「アダム・スミスは人間は利己的の動物」すなわち「如何にも人は利己的の動物で成るだけ少なく働いて成るだけ多くを儲けようとする」動物であると「仮定して経済学を書いて居る」が、人間には「その中でも随分その反対に献身的のこともあるではないか」という事実に着目して、スミスは「アゝ、間違つて居る」との一般的な批判である。これに対して、鎌田は「それは一を知つて二を知らぬ」と応える。「例へばアダム・スミスは人は利己的の動

---

48) 「グリーンバック紙幣」とは、戦争・革命時に国家が不換紙幣の濫発により不生産的支出を賄つたことからインフレーションが起こつた(古典的形態)。その例としてフランス革命時に革命政府が発行したアッシニア貨幣があり、また、このアメリカ連邦政府が発行したグリーンバック紙幣(greenbacks)が有名であり、わが国でも西南戦争時において明治政府紙幣が有名である(大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典』第3版、岩波書店49頁)。

物であるとして経済学を論ずると同時にモラル・センチメントといふ書物を書いて、人は同情の動物であるといふことを以て倫理的方面を説明して居るといふ事実がある」として、スミスの『道徳感情論』(*The Theory of Moral Sentiments*, 1748)の存在に注意を喚起する。それゆえ「スミスの経済書と倫理書と二冊の書物を併せて見ると、人間は一面に於て利己の他面の於ては同情の動物であるということが証明されるようになって居る」と指摘する。そのうえで、スミスは「経済論の内にも政治倫理等の多方面の事を忘れない、それで純粹の学者でありながら常識を失わぬ実地的の議論をする」として「さすがにやはり大家である」と。このようにいわゆる「アダム・スミス問題」<sup>49)</sup>について、鎌田はこれをスミスにおける経済思想史上の解釈の矛盾と理解するのではなく、「常識を失わぬ実地的の議論をする大家」と指摘しているように、彼の現実的・実践的志向からスミスを高く評価していることは注目に値する。

第二にリカードウへの一般的な批判を取り上げる。「リカードはこれ〈スミス〉に反し、実際の銀行家で明瞭な頭脳に多くの実験を貯へながら晩年純粋な学者を以て立つた。苟も学者となる以上は純然たる理論を以て自己の定説を主張せんとして、故らに実地的事情を交へずして独得の地代論を主張した」。それゆえ「その主張の進路に横はる個々の事情は態と顧みないといふことは彼自らの所言である」(277)という。

このように「これ等の諸大家に依つて経済学がこの世界に学問としての存在を興へられ、その後輩出したる経済学者はこれを標的として、或はこれに反対してその誤謬を指摘し、或はこれに賛成してその欠陥を補填しつゝ進んできた」との経済思想史観を鎌田は提示してのち、「古人の説は陳腐に属し、今日の進歩したる経済事情に合わぬ点が多い」ため「近時の学者がその欠点を指摘

49) 「アダム・スミス問題」とは、「同感」を原理とする『道徳感情論』を執筆後、大陸でフランスの唯物論の影響を受けて「利己心」を原理とする『国富論』を執筆することで、「同感」の倫理学者から「利己心」の経済学者へ転向したのであり、スミスの両著作の基本原理は両立しないという主張であり、19世紀末のドイツ歴史学派の経済学者ハスバハ(W. Hasbach)によって問題提起された。しかし、『道徳感情論』が『国富論』執筆後も改定されつつ出版されたことは、少なくともスミスは両著作を対立するものとは考えていなかった。この点から考えると、この問題はすでに過去のものだといえる(前掲書『経済思想史辞典』3-4頁)。

するに汲々たるも亦素より当然で、それでこそ学問は進歩するのである」という。この立場に立つて鎌田は「学生等が古大家の反駁せられ愚弄さるゝだけを見て古大家の論を読まずに冷笑するが如きは偶々自家の浅学短見を示すものであろうと思う」として古典を学ぶ重要性、すなわち経済思想史研究の重要性を指摘した。

## V 鎌田の経済思想史観

最後に鎌田は、慶応義塾の経済学教育・研究の特徴をあらためて以下のように纏める(277-78)。「慶應義塾最初の 10 年は経済学に及ばなかつた。その次の 20 年といふものは甚だ幼稚なる有様に於て経済学を一の読書術の一部分として教えて居つた。けれども又個人としては相当に研究した人もあつたと見てもよい」。とはいえ、慶応義塾では「トラスト問題、鉄道問題、労働問題、関税問題」など「経済学各種の問題を研究するなどといふことはあまりに起つて居らぬ」にもかかわらず、「部を分け科を分けて細かく研究するといふことは欧米に於ても近来に至つて大いに進んだ」ことであり、それに対応するために、慶応義塾に於ても 1890(明治 23)年に「大学〈部〉」を建て、その内の経済学科には専門の教師が揃つて教授し、学生も亦経済学を目的として研究せられた結果非常な進歩をなした。塾の先輩が初め辞書と首引でウエーランド経済書を読んだ 40 年前の事から比べて見ると、ほとんど雲泥の違ひを見るような訳で実にその進歩を祝せざるを得ぬのである」と。

このように改めて慶應義塾の経済学研究の歴史を略説した鎌田であるが、その経済思想史観には、以下のような先進性と特徴を読みとることは可能であろう。

第一に、いわゆるスミスの解釈についても、日本だけでなく、ヨーロッパの思想研究をみてもきわめて先進的かつ独創的な解釈であろう。つまり、アダム・スミスの会編『本邦アダム・スミス文献』<sup>50)</sup>によれば「倫理学と経済学との関係についてのアダム・スミスの思想がはじめて問われたには、京都大学の

50) アダム・スミスの会編『本邦アダム・スミス文献』増補版、東京大学出版会、1979。

倫理学教授、藤井健治郎博士によってではなかったかと思う<sup>51)</sup>。……そののち、高橋誠一郎博士の論稿などが現れたけれども、問題の詳細な展開と経済学の方法論への関心を寄せた分析は、長谷田〈泰三〉教授のこの論文〈「アダム・スミスと利己心」<sup>52)</sup>〉によって、はじめてもたらされたといえるだろう<sup>53)</sup>。この指摘が正しいとすれば、1907（明治 40）年段階における鎌田による日本における「アダム・スミス問題」の問題喚起は、長谷田よりもきわめて早い段階のものであり、鎌田がスミスの『道徳感情論』を直接読んだかどうかの確認がないにせよ、スミスの日本への導入史にとって注目すべき指摘であろう。ちなみに、この「アダム・スミス問題」に関わって「スミスの経済学並にその歴史的背景より理解しようとした優れた研究」とされるのが大河内一男『スミスとリストー経済倫理と経済理論』<sup>54)</sup>である<sup>55)</sup>とされるが、大河内よりも 30 年以上も前に、その研究の緻密さは異なるものの、その研究の先進性は明らかであろう。

第二に、スミス解釈と同様、ミル解釈についても、その先進性が指摘できよう。すなわち、ミルの「生産・分配二分法」に着目し、分配の人為性ゆえに、私有財産性だけでなく、社会主義・共産主義の選択の可能性に言及しただけでなく、ミルによる「セーテリスパリバス〈*ceteris paribus*〉即ち他の物が同一としたならば斯うだといふ」論理の特徴に着目し、それが、自由貿易・保護貿易など実践的課題に対する理論の妥当性に大きく影響することを指摘している。これらは、まさに当時のミル経済学の先進的解釈であり、日本だけでなく世界のミル研究史上、特筆すべき解釈として位置づけることができるであろう。

以上のような、個別の経済思想家への新しい解釈に加えて、

第三に、鎌田の経済思想史研究は、理論的説明やその展開にではなく、政治的・時事的関心にもとづくものである。例えば、ミルの『経済学原理』を取り上げて「一冊読まうものならば天下を治むることは何でもないといふ位ゑらい

51) 『哲学雑誌』1918 年 7 月。

52) 『経済学論集』[アダム・スミス生誕 200 年記念論集]、1923 年 6 月。

53) アダム・スミスの会編前掲書、解題：出口勇蔵、72-73 頁。

54) 大河内一男『スミスとリストー経済倫理と経済理論』日本評論社、1943。

55) アダム・スミスの会編前掲書、解題：岸本誠二郎、180 頁。

もの」であり、それは日本だけでなく、この時代の「西洋でも同じこと」で、実際「今日の英国の有名な政治家などといふものは大抵このミルの経済論によって育てられた」と政治家鎌田の視点から、高く評価していることから分かる。

第四に、鎌田の経済思想史研究には、その背後にある各国の経済発展の段階を踏まえた、理論と歴史との相対評価が見られるということであろう。例えば、マーカンティリズムと重農主義と説明に際して、その理論の歴史的背景をヨーロッパだけでなく、日本にも求め、その理論の歴史的妥当性に大きな関心を払っているからである。